明治維新と霧島 その6

明治維新と山ヶ野金山 2

【郷土史への扉】

今年は明治維新から百五十年の節目の年です。今回は、九月号に引き続き、横川町上ノにある山ヶ野金山の明治維新期の近代化について紹介します。

山ヶ野金山の近代化

山ヶ野金山は、寛永十七（一六四〇）年の発見以来、日本屈指の金山として金を産出していましたが、万治二（一六五九）年をピークに産出量が減少していきました。そこで、幕末から明治初頭にかけてフランス人の鉱山技師を招いて採掘や製錬方法の近代化を図りました。

金山の所有者である島津家は、明治三十七（一九〇四）年に金山の大拡張を計画しました。その予算額は八十二万円。※1現在の金額に換算するとおよそ百六十四億円で、島津家が山ヶ野金山へ寄せた期待の高さが伺えます。

山ヶ野金山と五代龍作

島津家は、鹿児島出身の実業家・五代友厚の娘婿であった五代龍作を第七代鉱業館長に任命（明治三十七～四十五年）し、金山の拡張事業を担当させました。

五代龍作は安政四（一八五八）年に和歌山県の久里家で生まれ、明治十五年に文部省留学生として渡英。ロンドン大学で機械工学を学び、明治十八年に帰国。東京大学教授となりますが、翌年に辞任して五代武子と結婚しました。

山ヶ野金山の大規模な近代化に着手した龍作は、金山から約三十キロ離れた天降川沿いの水天渕（隼人町嘉例川）に水力発電所を建設し、発掘設備の動力を電力に切り替えました。龍作が行った事業は次のとおりです。

- 水天渕水力発電所の建設
- 電力による製錬所の建設
- 坑道の拡張、縦坑の掘削

この拡張事業により、金の産出量は明治初期の十倍となりました。

山ヶ野金山と西郷菊次郎

五代龍作の後を引き継ぎ、第八代鉱業館長に就任（明治四十五年～大正九年）したのが西郷菊次郎でした。

菊次郎は、西郷隆盛と愛子（愛加那）の長子として、文久元（一八六一）年に奄美大島で生まれ、九歳の時に鹿児島の西郷本家に引き取られました。十七歳で西南戦争に薩摩軍の一員として参戦し、延岡・和田越えの戦闘で右足に銃弾を受け膝下を切断。重傷を負っていた菊次郎は、桐野利秋の計らいで政府軍にいた隆盛の弟・従道の下へ投降しました。その後、二十三才で外務省に入り、アメリカ公使館や※2宮内省に勤務。台湾の基隆支庁長や宜蘭長官、京都市長を歴任します。

山ヶ野金山では、金山に勤める鉱員やその子どもたちのために鉱業館夜学校などを私費で建てます。人材育成や鉱員養成に当たり、衆議院議員や栃木県知事、警視庁剣道師範など多数の人材を輩出しました。

また、金山の近代化により金山の廃棄物が下流域の水田に流入し、農作物が取れなくなると、導水工事を行い、水田をよみがえらせました。菊次郎が行った事業は次のとおりです。

- 夜学校の開設
- 武道館（心身の鍛錬所）の開設
- 水田への導水工事
- 娯楽（囲碁、将棋、図書、テニス、ビリヤード）施設の設置
- 鉄橋の架設

菊次郎は金山に働く人々やその子どもたちのために環境整備を行いました。台湾では台風などによる被害が多かった宜蘭川に堤防を築くなど、地域住民のために尽力する姿から菊次郎の人となりが伺えます。父・隆盛の「敬天愛人」という人生哲学を身をもって体現したのではないでしょうか。

（文責＝鈴）

水天渕発電所（尚古集成館所蔵）

西郷 菊次郎
（出典：京都市営電気事業沿革誌）

※1　明治四十年頃の一円を約二万円とした。
※2　昭和二十二年まで存在。宮内庁の前身。